

## 2017 年度文字文化財研究所事業報告

### 2017 年度文字文化財研究所長

2017 年度はこれまでも増して、本研究所の独自色を打ち出す事業が展開されました。2016 年度に 4 年計画で構想された「国際 HAIKU プロジェクト」の 1 年目の実施をはじめ、書誌学や貴重書に関わる活動のほか、外国資料から日本語の歴史の奥深さを説き明かす事業など、実に充実した取組みとなりました。

#### 【事業概要】

### 1. 国際 HAIKU プロジェクト——日本の〈俳句〉から世界を駆けめぐる〈HAIKU〉へ

この事業の幕開けを飾って下さったのは、越境文学の傑作と評された『わたしの日付変更線』（思潮社）で 2016 年に読売文学賞詩歌俳句部門賞を受賞された西ミシガン大学教授のジェフリー・アンゲルス氏でした。



2017 年 12 月 20 日に「詩歌俳句が国境をまたぐとき——翻訳の困難さと可能性」と題して講演していただいた内容は、私たちの期待を大きく上回る世界大のお話でした。すでに講演タイトルが示唆していますが、日本の数多くの詩歌俳句の翻訳を手掛けてきたジェフリー氏であればこそ、日本発祥の俳句が〈HAIKU〉

として、世界で縦横無尽に広がるその様を活写できたのだと思います。まさに「国際 HAIKU」そのものでした。教職員のみならず、多くの学生の参加が見られましたが、何より素晴らしかったのは学生からジェフリーさんに発された問いの質の高さにありました。その後、ジェフリーさんが送って下さったお便りに、そのことがはっきりと示されていました。少々長くなりますが、以下に引用させていただきます——「すっかり県大に惚れました！…（中略）…東京大学で一度集中講義を教えたことがあります。東大の学生は頭がよくても、恥ずかしい質問を聞くのが嫌なので、毎日、沈黙が連続してしまいました。その東大の経験に比べたら、県大の方がよっぽど楽しくて、県大の学生の質問のレベルがよっぽど高かったです。勉強の情熱がよく伝わりました。国際俳句プロジェクトに参加させて頂いて、私にとっても貴重な経験でした。もちろん、アメリカ文学が大好きですが、この数年間、近現代日本文学だけに集中していますから、県大の皆さまのお陰で、日本の影響を受けてアメリカで書かれた文学に久しぶりに目を向けることができました。自分のルーツに戻ったようなものでした。」（2017年12月21日付私信）。なお講演前の12月18日と19日には、ブラジル・サンパウロ大学大学院から日本の〈俳句〉とブラジルの〈ハイカイ〉の研究のために同時期に来日していたデボラ・タバーレスさんとのコラボ授業も実現し、本プロジェクトの越境的性格がさらに際立つ企画であったことも付言しておきたいと思います。

2018年度の本プロジェクト事業の第2弾は、「国際 HAIKU プロジェクト実践編——実際に俳句をつくってみよう！」として、国際的に活躍する講師の手ほどきを得ながら、高校生や一般の方々を対象に、「俳句の国際化を知り創作する」今年とは一味違う発展形の事業が予定されています。

## 2. 「稀書の会」事業——古典籍から考える地域の文化

文字文化財事業「稀書の会」に関わっては、2017年度には2つの活動を実施しました。1つは、2017年9月7日、慶應義塾大学教授で本学客員共同研究員の堀川貴司氏をお迎えし、「古典籍を見る——愛知県立大学の蔵書から」と

題する書誌学講演会です。文字通り、本学所蔵の貴重書を用いながら、江戸期の京都地下官人、神官活動、尾張藩士の活動、名古屋における出版など、書誌調査を起点に幅広いお話をいただきました。約70名の学生が参加し、講師が示す各種資料からの研究の糸口は、大いに学生の知的関心を刺戟するものとなりました。もう1つは、2017年11月16日から12月13日まで開催しました愛知県立大学所蔵の貴重書展示です。「旅する俳人たち」と絶妙なタイトルで実施したこの図書館展示は、文字文化財研究所事業として位置づけられた「稀書の会」の活動の紹介も兼ねた機会ともなっています。当該活動は教員のみならず、関係する院生や学部生も積極的に参加することによって成り立っており、この点において、地域の文化に対する理解を深める教育的効果も併せ持っている点は、特記しておくべきことがらであります。

### 3. 共同研究シンポジウム——「外の視点」から浮き彫りになった日本語研究

本学客員共同研究員と本学教員とのコラボレーション事業として、2018年1月29日に、「Nifon / 니혼 / Нифон / Nippon / にっぽんのことば——外の視点による日本語史研究」が実施されました。本学の国語学の2名の教員（福沢将樹教授・久保菌愛准教授）がおこなっている外国資料研究会を基



礎にして、客員共同研究員の川口敦子三重大准教授と斎藤文俊名大教授の4名による共同研究の成果が発表されました。本シンポジウムの副題に示されている「外の視点」とは、朝鮮資料、キリシタン資料、ロシア資料、そして明治初期聖書翻訳からのアプローチを指してのものです。こうして立体的に浮き上がらせられた日本語の歴史には、私たちがあまりにも知らずにきた／深く考えを

めぐらせることのなかった諸相がふんだんに詰め込まれていました。興味深いシンポジウムのこうした側面を裏づけるかのように、当日は天候がすぐれない日曜日の開催となったにもかかわらず、約 100 名の参加者を得て盛会に終わることができました。

#### 【2017 年度『文字文化財研究所紀要』（第 4 号）】

上記【事業概要】における活動それ自体に、客員共同研究員と本学教員（研究員）との共同成果の一部が含まれてはいるものの、本年度の紀要においても、多岐にわたる領域から 7 本の力強い論考が発表されました。「国際 HAIKU プロジェクト」関連の論考はもとより、「稀書の会」事業と関わる成果発表、さらには現地調査を踏まえた文献調査など、堅実な個人研究はもとより共同研究も含め、対象および方法ともに、多彩な刊行物となっていることがわかります。特筆すべきは、そこに一貫して見られる「地域の文化」へのまなざしが、公立大学としての愛知県立大学の研究機関としての本研究所の性格を、見事に体現している点にあることです。文字通り、地域と世界につながる本研究所の成果といえます。

#### 【研究所会議】

今年度は研究所会議を以下の通り開催しました。

##### (1) 第 1 回文字文化財研究所会議

開催日時：4 月 10 日（月）13 時 00 分～14 時 35 分

開催場所：文字文化財研究所（H302）

出席者：川畑（所長）、伊藤、上川、宮崎、成瀬（学務課職員）

議題：H28 年度決算・H29 年度予算計画、H29 年度事業計画

##### (2) 第 2 回文字文化財研究所会議

開催日時：5 月 22 日（月）10 時 30 分～11 時 50 分

開催場所：文字文化財研究所（H302）

出席者：川畑（所長）、伊藤、上川、宮崎、成瀬（学務課職員）

議 題：第1回書誌学講演会講師謝金の支払い、平成29年度文字文化財研究所紀要  
研究所購入図書の保管・取り扱い  
報 告：H29年度事業計画進捗状況

(3) 第3回文字文化財研究所会議

開催日時：9月25日（月）10時40分～12時25分

開催場所：文字文化財研究所（H302）

出席者：川畑（所長）、伊藤、上川、宮崎、成瀬（学務課職員）

議 題：平成30年度事業計画

報 告：研究所購入図書の管理

(4) 第4回文字文化財研究所会議

開催日時：2018年1月17日（水）～1月23日（火）

開催形態：メール会議

報 告：研究所運営費の予算執行状況について

議 題：今後の予算執行計画について

(5) 第5回文字文化財研究所会議（予定）

2018年2月～3月に2018年度への引継ぎのために開催予定。

## 【2016年度および2017年度収支報告】

2016年度の研究所の決算報告は以下の通りです。

(単位：円)

項目	予算額	執行額	差引額	内容
紀要発行	540,000	420,168	119,832	印刷費、発送費
各種講演会費	30,000	69,640	△ 39,640	講師謝金、旅費等
図書購入費	145,000	321,141	△ 176,141	
旅費・運営雑費等	170,000	70,260	99,740	
合計	885,000	881,209	3,791	

2017年度の研究所の予算・執行状況（2018年2月時点）は以下の通りです。

(単位：円)

項目	予算額	執行額	差引額	内容
紀要発行	540,000	567,516	△ 27,516	印刷費、発送費
各種講演会費	462,000	545,152	△ 83,152	講師謝金、旅費等
旅費・運営雑費等	112,000	7,580	104,420	
合計	1,114,000	1,120,248	△ 6,248	学部事業経費より補填済

外部（とりわけ海外）からの講師招聘の過程で生じた事情により、講演会費が予算額を超過する結果となったことから、全体の収支にマイナスが生じた。この点は、今後の事業を展開するための予算の要求と執行の過程において、常に留意されるべき点です。

(文責・川畑博昭)